「試合に勝てないと面白くない。だから攻撃を意識した守備戦術を指導」

ボールを闇雲に奪いに行ってかわされ、大きなピンチを招くことが多いのがジュニア年代だ。攻撃を好む傾向にあるこの年代の子どもたちに守備のエッセンスを正しく落とし込むのは難しい事なのかもしれない。
全日本少年サッカー大会の本大会に３度出場している福岡県のタウンクラブの指導者に「重視して練習している」という守備の指導について聞いた。

株式会社　ベースボール・マガジン社発行 「サッカークリニック　６月号（2016）」 取材・構成 / 平野貴也 様　写真 / 平野貴也 様より

特集④　ジュニア年代の指導者に聞く

藤川英雄・代表（FC 上西郷 West Kids / 福岡県）

競り合いに持ち込む Defense foorce **improvement** lecture #4

■練習は上級生と下級生に分けて行っているようですね。守備の指導内容にはどのような違いがありますか？

藤川　下級生に対しては、サッカーを楽しむということをコンセプトにしていますので、細かいことはあまり言いません。守備に関しては「しつこく粘ろう､ボールを奪おう」という程度にしています。もっと言えば、自分がボールを持っている時だけに関心を抱くのではなく、相手のボールを奪いに行く習慣や姿勢が身に着けばよいだろうという程度に考えています。ただし、小学３年生の段階で意欲や能力の高い選手がいれば、上級生の練習に参加させて、技術や戦術の理解を向上させるための練習を行うようにしています。
　上級生には「１対１」でのボール奪取はもちろん、「２対２」でのチャレンジ＆カバーも教えます。それから競りながらボールを相手からプロテクトして「味方のカバーを待つ」という守備も教えています。頭を使ってよく考えて、特に相手ボールのインターセプトを狙える選手をたくさん育てたいと思ってます。

■「味方のカバーを待つ守備」についてもう少し教えてください。

藤川　個人の力でボールを奪いきれればベストですが、実際には誰もがそれがうまくできるわけではありません。だからまずは、相手から奪いきれず、攻撃に移ることはできないけれども「相手にもコントロールされることがない」という競り合いの状況に持ち込むことを考えます。そうすれば見方がカバーに来てそのボールを奪える可能性が高まります。
　相手とボールの間に体を入れて、相手の体だけを抑え込んだらファウルになってしまいますが、ボールに触れながらのキープであれば相手をブロックできます。特に能力の低い子どもにこうしたプレーを

教えておくと「自分にもできることがある」と考え、できるところまでトライしようと頑張ります。またそうやってボールを奪う経験を積んでおくと、味方のカバーに入る意識が高まったり、自分でも奪いきれるようにしようと頑張り始めたりします。

■ジュニア世代では、個の技術の向上が重視される傾向にあると思います。しかし「ＦＣ上西郷ウエストキッズ」の上級生には複数の選手による戦術的なボール奪取を教えているのですね。

藤川　個人の能力を高めることはもちろん大事です。ただし育成にはある程度の時間がかかりますし、サッカーの面白さを覚える方法は個人技を高めるしかないわけではありません。「近隣地域の子どもたちだけで高みを目指して頑張ろう」というチームですから、試合で勝機が見えないようでは目標を見失ってしまいます。ですから各選手が勝利に貢献できる方法を提示しています。

　そして、それらの方法を少しずつ覚えて「全員で頑張る」という経験を通して勝利を味わうことで、子どもたちの「うまくなりたい」「うまくなろう」という意識や雰囲気を高める方針でやっています。子どもが自分から意欲を示すようになれば、教えていないことでも覚えられます。守備に関しては「１対１で奪える」のが理想的ではありますが、それが難しければ味方と一緒に相手を挟み込んで奪えるように教えています。

「挟み込んで奪う」の延長線上にあるのが、例えば１人目が相手を遅らせて、２人目がボール保持者を挟み込むように追い込み、どちらかがボールと相手の間に体を入れてブロックし、その間に３人目がボールを奪う、という連係した守備になります。但し、８人制になってからは１つの局面に３人も人数をかけることはできません。８人制では「２人で挟んだ後のインターセプトを狙おう」と教えています。

■常に自分たちより強い相手との対戦を想定しているのですね。

藤川　上西郷にとって守備は生命線です。地元の子どもたちが通う本当に小規模なチームなので、全国大会を狙えるのは、野中優之介選手（アビスパ福岡Ｕ-18.→福岡大学）たちのように優れた能力をもった子どもが入ってきた学年に限った話です。現在のチームは地区予選を突破して、福岡県大会に出るのが目標です。「福岡県大会出場」という成績は保ちつつ、攻撃の能力を持った子どもが入ってきた時に勝負するためには、安定した守備が欠かせません。

守備を頑張ると大事にされる Defense foorce **improvement** lecture #4

■２００９年１０月に全日本少年サッカー大会の本大会で見せたプレッシングは印象的でした。

藤川　球際で勝っていたということは当時も評価してもらっていました。私たちのプレッシングにはチームの約束事が１つあります。「自分がボ―ルを奪われた場合、奪った相手がボールを離すまでは、絶対に奪われた選手が食らいつくこと」です。追いかけた結果、自分あるいは見方がボールを奪えればミスを帳消しにできます。この約束事は失敗しても取り返せることとプレーに責任を持つことを教えるために導入しています。

　練習では「２度追い」を当たり前のようにやっていますし、当時は 11 人制でしたので、特に運動量を活かして攻守両面で優位な局面をつくることができました。さらに能力の高い子どももいましたので、

ボールを取ることさえできばゴールを狙えました。それに実際に攻撃回数を多くすることができたからこそ、選手は攻撃の感覚を磨くこともできました。
　選手はハイレベルな世界に触れることで成長します。もちろん､｢勝敗がすべて｣ではありあませんが、少しでもレベルの高いチームや選手と対戦することで、意識を高めてあげたいと思っています。

■当時は運動量が豊富だったので、連係による力もあったと思いますが､「１対１」のコンタクトプレーでも非常に力強さを感じました。

藤川　体を当てる練習はよくやっています。但し、球際では頑張ってほしいのですが、けがはしてほしくありません。私自身が現役時代に何度も膝を負傷したものですから、同じ思いはさせたくないと思っています。
　球際での守備では１つだけこだわって教えていることがあります。
「足の内側で奪おうとしないこと」です。正面から足を出して衝突するような形ではなく、並走して足の外側から寄せて、ボールと相手の間に体をねじ込むようにと教えています。

□並走するとなると、相手をタッチライン側へ追い出す形にする前提でしょうか？

藤川　自陣での守備ではそうです｡しかし相手陣内であれば逆です｡外から内側に追い込みながらプレッシャーをかけます。そのほうが相手がロングパスではなくショートパスで逃げようとするのでインターセプトを狙いやすいですし、奪った後に攻撃に出やすいので、他の選手が多くの狙いを持つことができます。

■「体を入れ込む」ためのタイミングをつかめない選手もいるのではないでしょうか？

藤川　そうですね。「立った状態で体を当てろ」と言われてもどこにどうやって当てていいのか、その感覚をつかむのは難しいと思います。ボール保持側は多くの場合、ドリブルで移動してリズムも変化させてくるので余計に難しいでしょう。
　ですから座った状態から初めて、ルーズボールを競り合う練習をします。相手にも勢いはないので当たりやすいですし、相手がまだ入り込んでいない空間に状態をねじ込む感覚を覚えられます。この練習に慣れてきたら後ろ向きの状態からスタートするなど、様々な形からコンタクトプレーを行うようにして、相手と接触する恐怖心を取り除いていきます。

守備を頑張ると大事にされる　Defense foorce **improvement** lecture #4

■幼いうちはサッカーを好きになるためにも「守備より攻撃を重視すべき」という声もあると思います。しかし、むしろ守備の中からできることを教えていく手順なのですね？

藤川　「子どもには攻撃重視の指導がいい」という意見も理解できます。守備ばかりでは確かに面白くないでしょう。しかし「ボールを奪うゲーム」を練習で多く採用すると選手は楽しみながら守備を覚えることができます。「ジュニア年代では勝敗より内容だ」といっても勝てる見込みがないのではそれも

また面白くありません。「守備の練習」というとボールを奪うところで終わるというイメージをもたれる方もいるかと思いますが、私たちが実際に行っているのは「ボールを奪うところから攻撃の練習を始める練習」です。守備を強化したいときでも「守備が７、攻撃が３」という配分で勝ち負けを決められるような設定の練習をまず行い、手ごたえが得られたら徐々に攻撃に重点を置くようにしています。

■守備重視の練習で育成するメリットは何でしょうか？

藤川　私は現在、母校である九州産業大学付属九州高校でも指導を行っています。セカンドチームや１年生を主に指導していますが、彼らの中にはボールに触ることは好きだけど、仲間と一緒に戦うことへの理解がない選手が少なくありません。彼らはジュニアやジュニアユース年代で技術を高めたにも関わらず、自己中心的なサッカーへの楽しさが捨てられず、チームの中で活かすことが出来ていないのです。そうした現状を見ていると、個人技を磨くことでボールを蹴る楽しみが増えるという話は一長一短ではないかと思います。「攻撃しかできない選手」と言われて、結局試合では起用されないということになると、上達の機会が減少してしまうというデメリットも抱えることになります。
もちろん、守備で頑張ることしかできず、技術が全く上達しないのであれば、同じような事が起きてしまいますが、守備が評価される面もあります。
　さらに、他人が嫌がることを率先してできる選手になれる傾向にありますので、どのチームでも仲間の１人として大事にされることでしょう。上西郷の卒業生が進路先でキャプテンを務めることが多いのはこうした背景があるからではないかと思います。
また、守備ができる選手が後々評価されるケースが多いので、長く活躍できる可能性が高いのではないかと感じます。

■守備の指導に注力するのは長くサッカー選手として戦っていくための基盤でもあると考えているのですね？

藤川　頑張るだけでも、うまいだけでもいずれ難しい状況を迎えることは確かです。最後まで大事にされるのは、自分を「チームの中の１人」としてとらえて、チームの為に戦える選手です。もちろんアプローチの方法はさまざまにあると思いますし、チームとしての指導方針と選手個人に対するアプローチは必ずしも一致しません。私たちのチームはジュニア年代ですので、能力の低い子どもでも貢献できることを考えていますが、能力の高い子どもには同じことを求めながらも攻撃面での工夫もアドバイスします。

■日本人は特に年齢が低いほど１つの指導内容だけを受け止めてプレーしがちだと思います。チームとしての指導と個人のアプローチの使い分けは難しくありませんか？

藤川　守備をベースに教えるチームですが、攻撃のセンスを持った選手を守備しかできない選手にしてしまうのであればよくないことだと思っています。ですからボールを奪った先のことを必ず意識させます。「どういう奪い方をすると攻撃しやすいのか」を考えさせ、奪い取ることだけに必死になってしまうのではなく、その先の展開をもちながら奪える選手になることが理想です。選手の能力に応じて、ど**こまで求めるかを調整するだけで、「サッカー的ではないこと」を教えるわけではないと思っています。**

■最後に今後の抱負をきかせてください。

藤川　特別なことを教えているわけではありません。それでも守備の時にインターセプトが狙えて、奪いきれて攻撃に展開できる選手を今後も育てていきたいと思っています。

「FC 上西郷 West Kids」の「守備練習」の考え方

1

練習からのアプローチ

守備ばかりの練習では面白くないかもしれない

↓

試合からのアプローチ

試合で勝てる見込みが少ないと面白くないかもしれない

↓

解決策

「勝敗を伴うボールを奪うゲーム」を練習で多く採用すると、選手は楽しみながら守備を覚えることができる

2

「守備練習」を育成の視点から見ると…

守備を頑張れる選手

II

他人の嫌がることを率先してやれる選手

↓

チームの一員として大事にされる

Let’s improve defense force good attack！

特集　「守備力ＵＰ！」講座

◆ 記事について

株式会社ベースボール・マガジン社様より　転載許可を頂き掲載させていただきました。